〈一冊の本〉

『漢詩選２　詩経（下）』

本研究所研究員
髙倉　統一（社会保障法）

高田眞治　著

集英社　1996年　5,631円（税別）

『詩経』、または「白圭」ということ

いい本との出会いは奇跡のようなものである。私にとってのそれは祖父における「白圭」である。

祖父は私物stuffにこだわる人であった。贈物を身に着けることなどついぞ見たことがない。家族はそれを知っているからおもには食べ物を贈った。私は自分の好きなものを贈り、自分で食べた。

孫をかわいがりもしたし、孫には無条件に甘かった。

その祖父がねだってもなかなかくれない物があった。外国製の腕時計と万年筆である。

万年筆の譲渡を申し出たのは高校生のときである。このとき祖父は「白圭」という文字を書き、これ（万年筆のこと）はいいだろう、という顔と、これ（白圭のこと）が分からなければ持つ資格はないだろう、という顔をした。

ことばの意味を尋ねると、自ら問う者が自ら答えを得るのだという趣旨のことをいっていた、と思う。いま風にいえば、いきなり巻末解答に飛びつくなということである。インターネット検索の現今ではほとんど成立しえない会話である。

万年筆は、そののち拝み倒して入手し、白圭の方は、忘れた。

祖父も亡くなり、爾後何年も経ってから、私は40歳を過ぎていたと思う、偶然手にした本によってこのことばを知った。白圭は『詩経』のなかの詩の一つであり、当時の宝石のことである。

白圭之玷　尚可磨也
斯言之玷　不可爲也
――白圭（宝石）が欠けたのなら磨けば磨ける。しかしことばのあやまちは取り返しがつかない。

『詩経』大雅、抑篇

私は、発見の偶然に感動し、詩の深さに感動し、中国文明の高さに感動した（どの証拠をもとにしても当時の日本は縄文時代である）。白圭にかぎらず、中国の古典はこちらが人生の経験を積むとある程度のすじみちが立ってだんだんに面白くなる。いろいろの場面でのことばの断片にいろいろの解釈がつく。高校生のころと異なり、いまはこの詩をある程度解釈し、しかしすべては実践していない。

が、それはとにかくとして、いい本との出会いは奇跡のようなものである。